

三つの伝承

―墓地・寺・地域名について―

石井 一夫

○墓地の伝承

「昔、木津川に大洪水があり、当時あった寺も墓も流されてしまった。（注・正徳年間の大洪水のことか）したがって現在ある寺（善照寺）は、大和にあった古寺を高台の現在地（小字西川原）に移し再興した。旧寺のあった所は小字本庄に寺屋敷跡として、奈良街道に面した土地が言い伝えられているが、その寺の名は不明である」また、墓地に関しては、「現在の木津川河川敷内で、当集落の東方にあった」とは、昔からよくいわれていることである。

昭和六十年十一月、精華町教育委員会が、国、府の補助事業として墓地の伝承のある百久保地先遺跡（中世墓地跡）を発掘調査された。これは、先に（昭和五十九年九月）私が、中世墓地跡の発見者として、新聞、テレビなどで大きく報道されたもので、町、町教育委員会その他の関係者各位の熱意と努力のおかげである。

その結果は、『京都府精華町埋蔵文化財調査報告書（第一集）百久保地先遺跡第一次発掘調査概報』として報



百久保地先遺跡（木津川河川敷内中世墓跡）

告されているので参照されたい。

発掘調査当時、集落の人達の間では「やっぱり古墓が出たか」とか「昔からの言い伝え通りやったな」と、当然の事として受け止めながらも大騒ぎであった。

後日、私の土地を出土石造物の保管、展示場所として提供する事になり、その準備に際しては、多くの人達に「先祖のことやから、また、地域の大切な文化財やから」と、進んで奉仕、協力してもらった。

当遺跡の発掘は、地域住民には直接関係する事からであり、したがって現在の生活からその昔、室町時代や南北朝時代のころまで当住民の先祖が高い文化を持っていたということなどを肌を感じる事ができ、さらには古代にまで思いをはせることすらできるのである。まさに住民にとっては生きた歴史とも言える。その持つ意義は実に大きく、また、重要なことだと思ふ。

今後、中世墓地制度の研究にとどまらず、文献史や民俗学など多角的な視点から調査研究が進み、地域住民の生きた歴史がさらに書き加えられる日を願う次第である。

○善照寺、及び流失寺院の伝承

先に書いたように、その伝承は「大和にあった古寺を移し再興した」ということで、大変つかみどころのない話であったが当善照寺の住職として池見澄隆氏を迎えることが出来、氏の協力で建立に関する記録を見つけることができた。すなわち「蓮門精舎舊詞第六冊」に「善照寺同末同州同郡船頭村起立開山不分明当寺者和州添上郡和爾村善照興申古跡在之承應二癸巳年（一六五三年）十月十五日靈巖院六世廣譽上人当時江引再興」とある。伝承の通り、大和国にあった古寺をもって再興したことが明らかとなった。ただ、どの寺を再興したのか、和爾村の廃寺のことなのか、それとも次に書く流失寺院の再興なのかは判然とはしない。この項でいえることは、善照寺の伝承は正しかった、ということである。

「多聞院日記」の天文十三年（一五四四年）四月二十一日の条に「七晝夜今日迄也無事結願珍重々々、ともり子のとむらひを受ハ時マまい二作て」として「木をくりてかせあるはマふて、こしぬらん、下こまの善勝寺」とある。伝承にある大洪水で流れた古寺の事であろうか。

下粕の里には古くより数多くの寺々があった。それらの寺跡は大体どの辺りにあったのか判っているが、当善勝寺については不明である。山城国に関する古い地誌にも記録されてはおらず、もつとも、流失寺院が正徳年間の大洪水によるものであり（百久保地先遺跡の調査結果からほぼ間違いでない^{と推察する}）また、「多聞院日記」が天文十三年（一五四四年）の記録であることから、他の地誌、古文書に無くても不思議ではなからう。

現在の善照寺と「多聞院日記」に出てくる善勝寺が同じ読みでもあり、なおかつ、善照寺が再興された寺であることも考え合わせてみれば、流失寺院は善勝寺のことであり、現善照寺はその再興された寺である、と考える

も良いのではなからうか。

私の住む地域は下粕郷の北東に位置し、東には木津川が流れ（古代ではもともと東寄りを流れていたらしい）、北は菱田郷、南は祝園郷に接し、共に平坦な水田地帯である。西は甘奈備丘陵が複雑な地形を呈し、その端に位置する鞍岡山、薬師山から半島状につき出た小高い岡の上にある。また、西部丘陵地帯から流れ出る煤谷川は、半島状の岡をはさんで二つの流れとなり、岡の北と南から木津川にそそいでいた。（現在はこの岡を二つに掘り割り一本の流れとして木津川に入っている）丁度、この岡は煤谷川の中州のような姿で直接木津川に接していた。その接する所に伝承の「ヤタラ藪」がある。藪の中には牛塚と言われる「土まんじゅう」のような高みがある。先に発掘調査された百久保地先遺跡もこの岡が木津川に入った位置にあり「ヤタラ藪」の南地続き（三百メートル）の場所である。この岡の東部一帯を昔より「東山」と呼んでいた。昭和の中頃まで東山の呼称にふさわしく老松の生えた松林が残っていた土地もあつた。このような岡の高台を横切つて奈良街道（郡山街道）が通り、南は祝園を経て歌姫へ、北は山本を通つて淡海（近江）へ通じている。岡の一番高い所の地名を「小字茶屋前」と言い、かつて旅籠や茶店のあつた宿場の名残を今に伝えている。

この小さな岡に、南、北、西と三方に三社の春日神社が祭られてあり、あたかも偉大なる東の木津川に対するかのように、なんだか古代人が木津川に抱いた思いを見る気がする。そういえば、木津川に面した水田を前田ツマというのも面白い。このように位置、地形から古代においては、水運、陸運共に重要な土地であつたろうと考えられる。また、木津川の対岸には、椿井大塚山古墳、平尾城山古墳があり、西は甘奈備丘陵を二つに割つて煤谷川が一直線に走り、その先に伝承の地、高山、天王、朱智神社（息長氏関係）などが一望できる。このような地形

なので、古代よりこの小さな岡に菱田城や大北城が築かれたのも当然だと思ふ。このような地形、位置を理解願うと、船長伝承^{フナギ}が伝わっている背景は十分理解してもらえないだろうか。参考ながら百久保地先遺跡からは弥生時代前期から各時代ごとの土器、瓦類も出土しており、さらにこの岡を調査すれば多数の資料が出土すると思うのである。

では、船長とは誰のことか？

私の結論から先というと、船長とは和珥^{フエ}氏のことである。

神功皇后伝承は各地に見られるが、特に隣り町の田辺町は息長氏との関係において非常に興味のある地域である。相楽郡にはこの船長伝承だけではなく他にもいろいろある。

神功皇后三韓征伐伝承の一連の流れで、「皇后が何をされた」「何々をした」といわれることは多いが、この伝承は「船長が住みついた」と、特定の人物を伝承している点が見逃せない。それだけ具体性に富み、この伝承の奥にある意味は非常に興味が持たれるところではないだろうか。神功紀または香椎宮縁起にも神功皇后が対馬の和珥津で準備を整え新羅征伐に向かった、とあり和珥津は船の発着する港であることを示すものである。和珥という名称はもともと船を鰐に擬せた名称であり、また、新撰姓氏録に崇神天皇の御世、任那が新羅と土地を争い、將軍の派遣を請うて来たので、朝廷では和珥氏の遠祖彦国葺命の孫で頭上に三岐のこぶがある塩垂津彦を任那に遣わされたとあるが、塩垂津彦というのは、遠い海を乗り越えて行くことから起こった名称で、和珥氏が海外の事を管した海洋族であることを示すものと思ふ。

ただ「ワダツミ」の神を祖神とする「アヅミ」の連、または安曇に代表される海人族と同一に考える事には更

に考証が必要であり、むしろ天孫族と直接に関連のある海洋氏族と考えるほうが、より和珥氏を理解する上に近いのではなからうか。そのような考えから、両氏族を一応区別するため、和珥氏を海洋氏族と私は決める。ここでは和珥氏が海洋氏族であったこと、神功皇后時代にはその海上航海を督していたことが明らかになればよいのであって、私が伝承の船長を和珥氏にしたことも理解願えるものと思う。

この南山城地方は特に和珥氏に関する伝承が多く、記紀にも随分と見ることが出来る。神功皇后が筑紫より大和に上がるとき菟道^{ウヅミチ}で忍熊王を討たせた者は記に難波の建振熊命^{タケフルクマノミコ}とあり、また紀には和珥臣の祖武振熊（記には彦国菴命が和珥臣の祖）とある。またこれより先に、崇神記には、山城の和訶羅河（木津川）のほとりで、反抗する天皇の異母兄建波邇安王の討伐を丸邇氏の祖（日子国夫玖命）に討たせている。このように大和朝廷と和珥氏は政治的にまた軍事的に強く結ばれていたのである。崇神記にある波布理曾能（祝園）は隣りの郷であり、敗走する敵建波邇安王の兵達を久須婆（樟葉）に追って行った道もこの地域（岡）であったろうと推定できる。このように南山城特にこの地域は和珥氏との関係においては深かったと言えると思うのである。

次に大和に興った和珥氏の本拠について考えたい。岸俊男先生の『日本古代政治史研究』に拠ると、現在の天理市大字和珥の地が最適だと考証されている。私がここで書くこうとしているのは、和珥氏の本拠地と考えられる現和珥集落内に祭られている和珥坐赤坂比古神社（延喜式神名帳記載）の氏子と当地域の氏子とが、昔より特別に深い関係に結ばれていることだ。先に善照寺伝承で明らかにした通り承應二年巳年（一六五三年）和爾の地にあった古寺を当地域に移し、流失寺院の再興をしたのも船長Ⅱ和珥氏として、一つの考証としてよいのではなからうか。さらに、和珥氏が春日の地に本拠を移し春日臣と名乗った地域は、現在の奈良市白豪寺町付近とされて

いる。この白豪寺には宅春日神社があり、この神社には次のような伝承がある。「春日大明神が現春日大社の地に鎮座されるに際し、当宅春日神社に先ず座し後に現春日大社の地に鎮座された。それで此の宮様を宅春日神社と言ふのである」と。この春日臣の本拠地であろう宅春日神社の氏子とも、先に書いた和珥氏の本拠地和爾坐赤坂比古神社の氏子と同様に、昔より深い関係を保つて来たのである。なお、前記二神社の鎮座地である曾布郡（後の添上、添下二郡）に祭られている添御縣坐神社の氏子とも前記同様の関係にある。かように和珥氏、春日氏の本拠地とされている地域に祭られた神社の氏子達と遠い古えより特別な関係を保つて来たのは何故か……

それを知るには三つの地域を一本の糸で結ぶ古代豪族和珥氏に何らかの理由、特性を求めなければならないのではないだろうか。すなわち、孝昭記にある和珥氏同祖系譜に天押帶日子命を始祖としたことの意義である。岸俊男先生の「ワニ氏に関する基礎的考察」の中で、そのことが書かれているので転載して紹介させてもらおう。「すでに述べたように天押帶日子命（天足彦国押人命）と大倭帶日子国押人命（日本足彦国押人天皇）とは兄弟で一对をなすものであるが、それには、天と大倭国（日本）をそれぞれ統治する者という意が含まれワニ氏の始祖である天押帶日子命の方が兄で国土支配の天皇に対して天を支配する者という觀念が含まれているのではなからうか。みずからの始祖をこういう形で表現したワニ氏は、皇別の氏の中でも皇室との結合をとくに誇示しようとする意識を強くもっていてそれがこのような孝昭記系譜となつて記中に定着されたのではなからうか。とすれば和珥氏の特性を考える一つの指標となるかも知れない」地（日本）を支配する弟の天皇に対し、天を支配する兄を始祖とする和珥氏の觀念、その觀念が記紀の中に定着をしていること、その事は非常に重みがある。まして、祭事を一番先に優先する古代国家にあつてこの觀念この事は和珥氏と天皇家とを同一線上におくものであ

り、和珥氏を考察する上での重大な示唆ではなからうか。戦後、古代史の研究が進み、いろいろな角度から考証考察がされるようになったが、目に見えない「モノ」（神霊）によって支配されていた古代のことからについては、目に見えない「モノ」（心霊）の目をもつて考察を進めなければ真の古代をすることが出来得ないのではないかとも思う。和珥氏の持つその特性を考える時、このような目で見ることにより、その後の歴史の上でたどる道すじも十分に理解されていくのではなからうか。

記紀によれば大和朝廷成立時には、政事的にも軍事的にも中心をなして活躍をした和珥氏が、その後、政治の場に姿を出さぬ事（和珥氏の同族は別）、あるいは后妃を出している諸豪族の中でも特に和珥氏九人は蘇我氏と並んで一番多くの后妃を出しており、その子供の男子は皇統に入らず、皇女が次の時代の皇妃になるといふ、他の豪族にない女系のつながりを繰り返す事は、和珥氏の特性であつて栗田勇氏も「神やどる大和」で述べられているように、和爾氏が天皇家と並列する位置を占めていたからではなからうか。国土を支配する天皇家に対して、天を支配する和珥氏の特長、觀念が光って見えるようである。また、時代が進むにつれ同族中の春日小野氏より猿女を出して行く事（和爾氏も一説には出していたといわれている）、また、継体天皇の擁立に際して継体の出自を疑う一部の大和在地豪族に対し、和珥氏の血統に連なる手白香皇女を皇后とすることで継体天皇の擁立が確保されるが、それにしても二十年近くも大和に入ることが出来ず、その子欽明天皇において初めて大和盤余イワレの地に宮を作ることが出来たのである。和珥氏が皇親的氏族といわれる特性であろうと思う。和珥氏の支配地、佐紀盾列の大小五十を越える巨大な古墳群が添御縣坐神社の祭られている曾布郡の地にある事も和珥氏との関連において考えるべき事であろう。

時代が進み、大化の改新により祭事中心の政治から中国を見習った制度による統治へ、とされるにおよんで、国の祭事は祭儀と化し、和珥氏の持つ特性（天の支配者）は存在の意義を失い社会的にも政治的にも氏族としての地位を確保することが出来なくなつたと考えられる。しかしもう一つの特性観念（大倭国「日本」を支配統治する）は、改新後の制度の中でも永く生き続けて行く事になるのである。この和珥氏に代表される「天」（神靈）に対する観念は日本人の持つ特性であつて、国家の制度がどのように変わろうとも民衆の中で生き続けて行くことになるのである。

しかし改新後の国家の制度が固まるにつれ、みずからの特性をもつて国家国政に関与することを氏族の基盤として生きて来た和珥氏が、また、その特性を保つが為に血脈の保持に努めてきたにもかかわらず、新しい国家制度から外され、さらには社会的に圧迫が加えられ抹殺さえもされていつたふしすら感じるのである。万葉の歌人、柿本人麿（和爾氏と同族）が宮廷歌人として大君（天皇ではない）をあれ程までも神神しく美しく歌いあげたのも和珥氏の同族として共通の観念に通じるものがあつたからではなからうか。また、その心情が人麿をして無美のまま石見の国に流され彼の地での死においやられた原因ではなかつたかと思う。私にはこの同族の歌人柿本人麿を思うとき、本宗和爾氏のその後のたどる姿とが二重に映つて見えてくるのである。

ともあれ、この船長伝承の地が、和珥氏の本拠地や春日氏の本拠地の氏子達と遠い古えより今日まで、永い交わりを続けて来たという事実は、和珥氏の持つ観念が千数百年も生き続けて来たといつても過言ではなからうか。先に書いた文化的にも高い百久保地先遺跡の出土石仏群や五輪塔、宝篋印塔等々、その外の数多くの出土物の前に立つ時、社会的に厳しい時を乗り越え、なおよくも中世（室町時代）の世までこれだけの文化を保ち続けた先

祖への誇りを感じるとともに、古代豪族和珥氏の残照を見る思いがするのである。

「船長伝承に対する考察」は、もつと考証を積み重ねて書く積もりだったが、あえて一文に纏めてみた。このよ
うな文章は単に一つの物語となる危険性をはらんでいることも承知のうえで、消えかけている多くの伝承を一つ
でも遺すために書いてみた。ここに書いた伝承にもつと考証を積み重ねられ確かなものになって行く日を期待し
て筆を置くことにする。